



TITLE:

天文同好會觀測部月報

AUTHOR(S):

CITATION:

天文同好會觀測部月報. 天界 1932, 12(135): 238-242

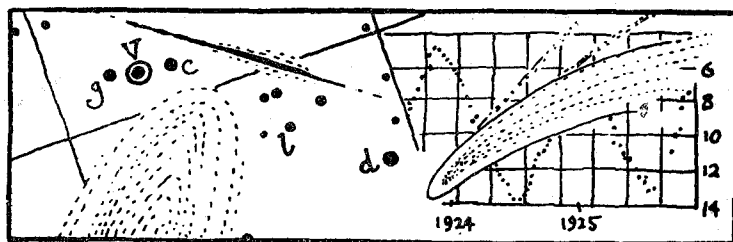
ISSUE DATE:

1932-06-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161983>

RIGHT:



天文同好會觀測部月報

觀測部流星課報告 (34)

課長 小湊孝二郎 (K. Komaki)

やつと、一九三一年の最後の報告を致すことになりました。此の際とくに御詫び申し上げたい事は、報告が自分の無力の爲いつも不行届に終り、其の結果を價値少ない事にするのであります。又平素は多忙とは云へ、課の皆様方へも不親切をきはめ、恐縮に堪へません。これではならぬと、いつも自身をしかるのではありませんが、生來の不精者でともすると怠り根性が出て弱い自分にしてしまいます。何卒御恕下さいまして、向後の御鞭撻をのみ御願ひ申します。

十二月は微光流星の三氏を加へ十二名の
方々が觀測をして下さいました。十一月に
比して甚だ見劣りはしますが、双子群の近
來珍しい出現も見られ、微光流星の佐藤
氏の貴重な輻射點追跡もありまして、私と
しても愉快を感じてゐる次第であります。

十二月の觀測概略 (Summary for December, 1931)

觀 測 者 Observer	略 符 Abbr.	觀 測 地 (Locality)	回 數 Nights	時間數 Duration	流星數 Meteors
八 幡 修 一	Yw	長 野 縣 平 野 村	1	90	40
小 湊 孝 二 郎	Ko	和 歌 山 縣 有 田 郡 金 屋	3	87	26
下 保 茂	Kh	札 幌 市	2	50	9
廣 瀬 永 治 郎	Hr	岐 阜 縣 美 濃 町	3	167	26
佐 々 木 一 二	Ss	京 都 府 福 知 山 町	1	30	6
麻 生 佐 七 郎	Ab	大 阪 市	4	132	10
天 野 吉 郎	Am	函 館 市	1	72	19
阪 元 鐵 馬	Sk	福 岡 縣 箱 寄 町	4	180	12
佐 野 英 主	Sn	京 都 府 何 鹿 郡 中 筋 村	13	645	418
長 谷 秋 男	Ng	山 口 縣 德 山 町	4	60	121
窪 田 繁 夫	Ku	京 都 府 福 知 山 町	3	180	55

此の外 高木逸平(京都市)、芳川悟朗(徳島縣)の二氏から火球の報告があつた。

1. 觀測の概略 (Daily Summary of Observations)

日時 Time (J.C.T)	觀測者 Obs.	時間 Dur.	流星 Meteors	F.	日時 Time (J.C.T)	觀測者 Obs.	時間 Dur.	流星 Meteors	F.	日時 Time (J.C.T)	觀測者 Obs.	時間 Dur.	流星 Meteors	F.
Dec.					Dec.					Dec.				
1.94	Sk	30	1	0.7	6.87	Kh	30	3	0.8	1.97	Ab	30	1	0.5
6.02	〃	60	3	0.6	14.20	〃	20	6(4+)	0.6	11.01	〃	30	1	0.9
10.96	〃	60	9	0.8	7.88	IIr	21	1	0.8	13.99	〃	42	5(2)	1.0
14.95	〃	30	0	0.2	10.90	〃	63	8(2)	0.8	14.97	〃	30	3(2)	1.0
5.89	Ko	40	8(1)	1.0	14.89	〃	83	17(11)	0.9	14.14	Yw	90	40(37)	1.0
10.86	〃	32	3(2)	1.0	13.19	Ss	30	6(5)		14.95	Ku	90	33(31)	1.0
14.99	〃	15	15 [*] (13)	1.0	14.93	Am	72	19(13)	0.8					

以下は微光流星の觀測である。

Dec.					Dec.					Dec.				
2.79	Sn	35	39	0.3	11.78	Sn	50	72	0.6	10.94	Ng	15	32	0.7
3.81	〃	45	48	0.7	12.22	〃	20	23	0.4	17.91	〃	20	45	0.8
5.87	〃	60	30	0.8	14.22	〃	45	12	0.3	30.92	〃	15	30	1.0
6.79	〃	50	27	0.2	15.23	〃	40	24	0.4	16.94	Ku	30	13	0.6
8.09	〃	110	29	0.6	23.84	〃	30	7	0.3	28.85	〃	30	9	0.4
8.78	〃	45	10	0.2	25.92	〃	15	6	0.5					
10.84	〃	90	91	0.6	5.91	Ng	10	14	0.8					

備考 1. 括弧内は双子座流星群に屬する流星數を示す。

2. * 印は數へたる流星數を示す。

3. 日時は觀測開始と終了との平均時刻を示すもので日の百分の一までを示す。

2. 流星群の出現狀況 (Notes on Apparitions of Meteor Swarms)

I 双子座流星群 (Geminid)

一九三一年の双子座流星群の觀測は八幡、下保、廣瀬、佐々木、麻生、天野の諸氏及筆者によつて、又微光流星では佐野、窪田、長谷の三氏によつて行はれた。十四

日は早晩並びに、夜半前の二回は晴天で各地とも觀測が出来たが、其の他は不充分であつた。

A. 出現の程度 (Frequency of Apparitions)

十四日夜半直前筆者は十五分の觀測を行つた。初めは徑路を記入するつもりでゐたが二三分の後あまり出現數が多いので、數だけに止めた。其の結果十五分に十五個(中十三個は双子座に屬すものと思はる)とい

ふ意外に多數のものを認めた。光度は主に二等級以上のもので中には木星の光をも凌駕するものがあつた。例年のペルセウス最盛期に劣らぬものであつた。同じ夜の觀測から福知山の窪田氏のは出現程度はむしろ

獅子座流星以上だとのべられてゐる。十四日
日曉に於ける八幡氏の觀測を見ても著しく

多數のものが記録されてゐることに氣がつ
くであらう。

B. 極大日時 (Maximum)

觀測數から極大日時を導びくには觀測が
充分でない。十二日乃至十五日迄の充分な
觀測が必要なのであるが、天候其の他で不

可能であつた。しかし恐らく十三日——十
四日の間に起つたのではなからうか。

C. 輻射點について (On the Radiant point)

觀測から輻射點のよく決定されたものは
少ない。十四日曉に二個、十四日午後に一
個決定されてゐるにすぎぬが、微光流星の
方面から輻射點の追跡が行はれた。

とくに、佐野氏が十日より十五日に亘つ
てなされたものは甚だ重要な價值をもつ様
に思ふ。其結果を記すと、

日 時 Time (J.C.T)	輻射點 R.P.		流 星 ↓	日 時 Time (J.C.T)	輻射點 R.P.		↓	日 時 Time (J.C.T)	輻射點 R.P.		↓
	R.A.	Decl.			R.A.	Decl.			R.A.	Decl.	
10.84	107	+34	50+	12.22	111	+32	4	15.23	113	+32	10
11.78	110	+32	17	14.22	112	+33	11				

流星の速度が緩やかなため徑路の記入は
精確に行はれ、したがつて輻射點の位置は
可成良い精度をもつてゐるものと思はれ

る。東方移動がよく檢出されてゐる。窪田
氏及長谷氏も此の群の輻射點を若干得られ
てゐる。

II 其の他の流星群 (Other Swarms)

著しい流星群の出現はなかつた。たゞ佐藤氏が微光流星群として、

魚座 ρ 流星群 (ρ -piscid) を 2日より6日まで

鯨座 α 流星群 (α -Cetid) を 2日 \times 5日 \times

アンドロメダ ρ 流星群 (ρ -Anctromedid) を 6日 \times 12日 \times

連續觀測されて、いづれも其の移動性を見
られてゐる。又例年出現する双子 β 流星群
(β -Geminid) を8日及び12日に觀測された。

長谷氏はオリオン流星群 (λ -Orionid) を5
日, 10日, 17日の三回に亘つて觀測され
た。

3. 觀測より誘導したる輻射點 (Radiant points derived from observations)

番 號 Curr. No.	日 時 Time (J.C.T.)	輻 射 點 Radiant Pt.		流 星 Meteors	觀測者 Observer	確 度 Weight	備 考 Remarks
		R. A.	Decl.				
1111	Dec. 14.14	113.5	+32	37	Yw	5	Geminid
1112	14.20	112.5	+33	4	Kh	3	\times
1113	14.89	114	+31	11	Hr	4	\times

観測者 (地名)	五 月						
	三澤 (諏訪)	龜井 (白杵)	伊達 (大阪)	木邊 (近江)	沓掛 (長野)	大橋 (京都)	千葉 (水澤)
1	12	12	0	11	12	曇	11
2	0	0	0	0	0	0	0
3	0	0	0	0	0	0	0
4	0	0	0	0	0	0	0
5	0	雨	曇	0	0	0	0
6	0	0	曇	0	0	0	0
7	0	0	0	0	0	0	0
8	雨	雨	雨	雨	雨	雨	曇
9	22	曇	11	22	11	11	11
10	11	11	旅	11	11	11	11
11	12	11	11	11	11	11	11
12	雨	11	曇	11	雨	11	曇
13	11	11	11	11	11	11	11
14	22	35	忙	35	11	11?	22
15	57	41	11	53	11	11	29
16	30	41	45	43	29	42	41
17	41	40	43	43	37	42	39
18	57	53	40	60	37	39	51
19	32	雨	雨	32	曇	曇	曇
20	33	44	30	36	25	雨	41
21	35	雨	曇	雨	曇	雨	34
22	38	38	39	41	曇	雨	曇
23	50	52	40	39	雨	37	雨
24	51	52	39	38	36	38	38
25	28	26	曇	29	曇	23	曇
26	26	26	26	26	風	23	曇
27	24	23	25	32	22	11	23
28	22	11	曇	22	曇	曇	曇
29	11	11	13	11	11	11	曇
30	14	11	11	11	11	11	11
31	11	雨	雨	雨	曇	曇	11
平均	22	22	20	22	14	15	18
日数	29	25	20	28	21	23	22

太陽課より

幹事 山 本 英 子

此の毎月の報告は、いはゞ假報告でありまして、各地で観測をして下さる皆さまからの御報告の受取り證を兼ね、太陽黒點の活動状況をとりあへず一目に見る役に立つために書いて居るもので御座います。それで、雑誌の編輯のメ切を氣にしながら、早く頂いたものから順に原稿紙に記入します。大抵、毎月のメ切は五日頃となつてゐますため、御都合で遅く頂いた御報告は、此の表に載せられないことになり、御氣の毒に存じます。書いてゐます時は、何ものにも急いでメ切る必要は無い。今四五日御待ちして、皆様の御報告を全部記入するやうにしたい¹と思ひますのですけれど、之れが愈々印刷されて世間に出ます時は月末になることを考へますと、餘り遅れたものを見るのは、氣が抜けたやうに思ひ、いやに感ぜられますので、(又、中にはずいぶん遅く報告を御送り下さるのが、待ちきれませんので)、やつぱり、上記の如く、太陽課のメ切は毎月五日にさせて頂きます。こんな事情のため、今までの分で、月報に現はれませんでした分は、

1932年一月の分 大橋氏

同 二月 〆 改發氏

同 三月 〆 改發氏

同 四月 〆 山田氏、木邊氏、千葉氏
改發氏、大橋氏

此等の御報告は皆メ切後に確かに頂きました。

彗星だより

花山天文臺 中 村 要

1932 a (Grigg- Skjellerup) 彗星 Van Bie-sbroeck によつて観測された3月6日のものは疑はしい事が知れた。ベルゲドルフ天文臺のショール氏も3月末まで観測出来なかつたので、4月28日に Van Bierbrseck 氏が観測したのが発見になるらしい。事情が多少やゝこしいので1932 aか dか分らない6月上旬には地球に0.25単位まで近づいて11等級となり大熊座を東進し1日に約3度動いた。観測と推算位置は餘りよく合はない。近日點通過は5月12日頃になる。甚だぼんやりした彗星であつた。

1932d (Houghton-Ensor) 彗星 ホートン彗星は Ensor 氏にも4月2日に獨立発見された。此の彗星は急速に北進して5月10日頃に赤道を通過、此の頃には10.5等位であつた。5月末には急に減光して豫定より

も淡く13等になつた。南阿ユニオン天文臺でよく観測された。花山では測微観測の機会を失つた。

1932c (Carrasco) 彗星 カラスコ 彗星は獅子座βの東を南下して6月上旬には13等となり観測が困難となる。各地の天文臺でよく観測されて居る。

Neujimin 彗星(1916Ⅱ) 此の週期彗星はベルゲドルフ天文臺のショール氏が100センチ鏡で3月26日より5月1日まで10回も探したが発見されなかつた。

Brooks, Kopff 彗星等の未発見週期彗星の推算は観測急報で發行するから希望者は筆者に申込んでほしい。(料金一回二錢)

訂正 6月號カラスコ彗星の日々運動に $+19' (?)$ とあつたのは $-19'$ であつた。

新刊紹介

J.H.ジーンズ著：宇宙の神秘（山村清譯：新物理學の宇宙像）

著者は既に天界誌上に於て讀者に見えた事のある理論天文學界の巨星であつて夙に物理學の方面に於てもその盛名を馳せてゐる。今回天文學教室の山村理學士の手によつて、「新物理學の宇宙像」なる表題でその翻譯が出来上つたのでこの機會に簡単な紹介を試みる事にする。

先づその第一章「滅び行く太陽」に於て舊時の天文學並に物理學の説く所とそれに依る人生觀が説かれてゐる。宇宙の宏大さを知り、滅び行く太陽を見る時、宇宙に於ける地球の貧弱さを慨嘆し人間の小さき營みのやがては無感覺な宇宙を残して滅んで行かねばならぬ事を嘆く。然しこの種の宇宙觀は新しき物理學の立場で見直す必要がありはしないか？

第二章「近代物理學の新天地」に於ては舊科學否舊時代の哲學が自然科學成立の一大鐵則と認めた因果律の起原に始まつて、それが新しい物理學殊に新量子論の展開につれ如何に崩壊したかが解説されてゐる。即ちハイゼンベルグ